

# 都留市商家資料館便り No.3

発行者 商家資料館 武井邦夫

平成30年6月吉日

監修 ミュージアム都留

## 一寸一服お城山一寸見学商家資料館



### 大正時代のガラス戸

### 資料館から手軽に登れる山

#### 谷村が織物の産地となつたいきさつ

谷村を中心にして郡内地方で織物が自家用から産業として織られるようになったのは、寛永十年(一六三三年)三代将軍家光の重臣、秋元但馬守泰朝(やすとも)富朝(とみとも)喬知(たかとも)三代にわたって藩主として治めていたとき都留市内に家中川を引き、里の副業として細細と織られていた織物を生かし富める里にするため、自分の出身地の上州総社(現在群馬県前橋市)から絹師を招き絹糸を作る蚕(かいこ)の餌となる「桑の木」を取り寄せ、里人や下級武士の奥さんに「はた」を織る技術を教え、織り上がった反物(たんもの)を、江戸や京都、大阪に宣伝したとされます。そのおかげで全国に郡内縞(ぐんないじま)の名が知られ、大勢の人々が谷村に集まり大変繁盛し、甲州織の基礎をきづきました。甲州織の特徴は木綿に比べその手触り肌触りにあって、これが京都大阪の人々に選ばれた物で、井原西鶴の「好色一代男」や、八百屋お七が火あぶりの刑に処せられた際にも着ていたなど、たびたび話題に上り、甲斐絹の美しさがもてはやされたと伝えられます。都留市商家資料館旧仁科邸は大正五年から十年にかけ建てられた建物であるがこうした先人の力が未来に続いたと言う事で、勝山城跡を写真に掲載させて頂きました。

俳人松尾芭蕉も数か月谷村に居たとされ、数々の俳句を残しています。城下町の散策・句碑巡り・都留アルプスと言って商家資料館の裏山にも登れます。勝山城跡は、商家資料館から徒歩で二時間もあれば満喫できます。市内にはリニア実験線見学センターもあります。



上の写真は絵甲斐絹裏地絵が入っています。

懐かしい写真もあります。

## 「甲斐絹」

甲斐の国(山梨県)で生産される「絹織物」を「甲斐絹」と呼び、当初甲府を中心とする盆地では「海機」又は「海気」等と呼ばれ、郡内では「郡内縞」(郡内織)と呼んで広く国内に知られていた。明治になって、「県令藤村紫朗」により、県内の絹織物は「甲斐絹」(かいき)と呼称されるようになった。時代とともに絹織物にも変化があり、服裏地・洋傘地等も出現して、更に新繊維の出現があり、「甲斐絹」は昭和十九年(一九四四年)にその歴史の場から静かに姿を消した。

## 「絵甲斐絹」

郡内織として知られた絹織物の中で、谷村を中心にした郡内織(甲斐絹)は、「絵甲斐絹」であった。「絵甲斐絹」は、羽織の裏地として生産され、文政の頃(一八二九年頃)から織り出され、明治に入って盛んになった。この「絵甲斐絹」には「がら」を手で描いたものと、織り出したものがあつて手描きのものには更に版木により刷り込まれたものの二種類があつた。



絵甲斐絹

## 「友禅」

「甲斐絹」の白地に型染めをほどこす手法である。都留市では昭和二十年頃まで、染色後に余分な染料や糊を洗い流す「友禅流し」が家中川で見ることができた。



家中川

家中川は寛永十三年(一六三六年)に秋元泰朝が普請した水路である。

編集後記 今回は、資料館から登れる山々を紹介しました。紙面の関係で谷村が織物として栄えたこと、甲斐絹の一部を掲載する事にしました。商家資料館では、町歩きや当館で俳句を書いてくれた方に、ミュージアム都留でボランティアの方が作ったコースターを差し上げることになっています。良かったら気楽に入館して下さい。

入館は火曜日・木曜日・土曜日・日曜日と祝日の午前10時から午後3時30分です。

館長 武井邦夫